

【2024 年度共同研究費 成果(経過)報告書】

一条校におけるアートを核にした
国際バカロレア教育 PYP カリキュラムの構築

鈴木光男^{*,1)}、太田雅子¹⁾、二宮貴之¹⁾、モーテン・J・ヴァテン¹⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学

研究背景と目的：アートを核とした国際バカロレア教育（以下、IB）の探求

近年、STEAM 教育の広がりと共に、アートが教育の中心にあると認識されている。経済同友会も探究型教育への転換を提言しており、IB とアートの親和性は高い。しかし、国内 IB のアート領域研究は MYP に偏り、PYP、特にダンスや演劇の実践調査は不足している。本研究は、この状況を背景に以下の 3 点を目的とする。

- ①国内外 IB 校の現状把握： インターナショナルスクールを含む IB 校を訪問し、指導計画や作品、学習環境を調査し、児童の学びと成長を明らかにする。
- ②一条校向けアート領域 IB プログラムの創出： 視察から得た知見を基に、日本の一条校で展開可能なアート領域の IB プログラムを開発し、理論と実践を結びつけた貴重なデータを提供する。
- ③独自プログラムの実証と効果測定： 国内外 PYP 導入校の調査結果に基づき、こども園・小学校で独自の美術・音楽プログラムを創出し、その効果を実証的に測定する。

最終的に、アートを核とした IB 教育の事例を日本から世界へ発信する挑戦的な取り組みを目指す。

調査結果と課題：教師のマインドセットの重要性

調査では、各 IB 校から資料提供を受け、学習環境観察と IB プログラムコーディネーターへのインタビューを実施した。焦点は PYP の Arts Scope and Sequence と POI の関連性、アート UOI のプロセス、日本の学習指導要領と PYP アートの関連性である。

国内一条校（以下、J-IB 校）では、図画工作専科教員の配置により、プレ・エキシビションでの具体物制作・発表が増加した。これは大きな変化だが、探究の深さに課題も見られた。児童同士の批判的対話や、教師による深い資料提供、生成 AI 活用による思考深化が望まれる。

国内インターナショナル IB 校（以下、S-IB 校）では、演劇教育への重点的な取り組みが顕著で、ステージプロダクションを通じた児童の社会的・感情的成長、リーダーシップ育成が促進されていた。児童がエージェンシーを発揮し、実社会の課題に演劇的要素を取り入れて取り組む、主体的な学びが実践されていた。

これらの結果から、「指導者のマインドセットの必要性和教育環境の充実が子どもに与える影響」が新たな課題として浮上した。探究型授業では、教師は知識を教えるのではなく、児童と共に学びを深める「同志」となる「双原因性感覚」が重要である。「教える」姿勢から「探る」姿勢への転換が不可欠であり、一条校での IB 教育導入においては、教師のマインドセットの転換と共有が極めて重要な課題となる。

今後の発表の予定

本調査・研究は、第 3 回聖隷国際教育学会で口頭発表（2025 年 8 月）、聖隷クリストファー大学国際教育学部研究紀要に投稿（2026 年 3 月）する予定である。

倫理審査	■承認番号（ 24037 ） □該当しない
利益相反	■なし □あり（ ）